

## 体育祭をよくする人

2024・9・25 重枝 一郎



以前にも紹介したが、「〇〇をよくする人」というGWTの話である。左のようなちょっとしたモデルが書いている紙に、「どんな頭」「どんな目」「どんな耳」「どんな口」「どんな心持ち」「どんな手」「どんな足」が、「〇〇をよくする人」につながるか、自分の考えを書き込ませる。その後、グループでコンセンサス実習をし、発表する。また、「実際の人」（身近な人・いいところさがし的に）を書かせて、グループでシェアリングし、発表する（①名前 ②具体的な場面・言動 ③そのときの自分の気持ち）さらに、学年集会等で発表。コンセンサスできたものを教室掲示したり、または廊下掲示したりする。他に、「クラスマッチをよくする人」「修学旅行をよくする人」「部活動をよくする人」「親睦遠足をよくする人」などにも活用できる。そのときどきで、いろいろな人のいいところ探しができる。

しかし、このような取組をしたら、突然すべてがよくなるということはない。ではなぜこのような取組が必要かという、まずは、認め合う体験をすることで、信頼関係が生まれ、ある行動をつくることで、まわりが変化する。するとその人の不安がなくなり、これで大丈夫という予測性が生まれると、いろいろな問題解決が容易になるからである。これが目的になる。

実は、先日、春吉中に出前授業（音楽・新開先生）に行った際、廊下に春吉中の生徒が何かの行事で取り組んだ「〇〇をよくする人」が廊下に掲示してあった。おそらく、私発信から、伝播した取組だとわかった。他校では、よく見かける光景である。

「〇〇」という行事が終わった後は、必ず振り返り活動をすることになる。活動後の振り返りは、「いいところさがし」や「トラブルの解決の時の自分の行動」などになる。教師が、絶対しなくてはならないのは、「努力を認める振り返り活動」である。これが、成長型のマインドセットを促す。

成長型マインドセットは、努力と忍耐を推進するエネルギーになる。努力をほめないで、才能がすべてだという伝え方をすると、生徒のモチベーションは破壊される。とにかく、「努力を認める」シャワーを浴びせていく。なぜなら、努力家が怠け者に対して良い影響を与えるより、怠け者が努力家に悪影響を与えることの方がはるかに大きいからである。

学校の特別活動の最上位の目標は、「共生社会の担い手を育てる」ことになる。そのために、このような学校教育は大切になる。そして、学校教育の最上位の目標は、「自律型学習者」である。生徒の言葉や行動を認めること、自分で決めること、任せること、そうでないと人は主体的に動かない。

すべての根底になくなくてはならないのは、コミュニケーション能力になる。学校で育成すべきコミュニケーション力は、まず、「他を思いやる心」。次に、「相手の意思や感情を的確に理解する力」。さらには、「自分の考え等を相手に伝える論理力」。理想は、「双方の考えから、新しい意味が生じるようなクリエイティブな対話」になる。スタートになる「他を思いやる心」については、全教育活動でのマインドセットとしていかななくてはならない。